

デモクラシー……民主主義って何？

「人民の人民による人民のための政治」という有名な言葉の通り、一部の権力を持つ人のための世ではなく、一人ひとりが大切にされる世の中を創る方法であり、政治的には国民主権・基本的人権・法の支配・権力の分立などが重要とされます。でもそんな大きな、かたくなるしいイメージの政治形態だけでなく、広く一般に、人間の自由と平等を尊重する立場、個人が尊重されるとともに、それぞれが全体への責任を感じていく精神をいいます。

デモクラシーはヨーロッパやアメリカから始まったように思われているかもしれませんが、実はアメリカ大陸へ渡ったヨーロッパ人が、ネイティブアメリカンとの交流の中で、彼らの部族間連合イロコイ連邦が築き上げていた平和のシステムに出会い、そこから学んだあり方でもあるのだそうです（『魂の民主主義』星川淳著）。星川さんのことばでは、戦争をしないですむ世界の実現を少しでも早めようとする努力が民主主義だとも。

ところがその精神は置き去りに、形だけが使われて行く中で、多数決イコール民主主義というような誤解が蔓延してしまっているのではないかと思います。そしてそれを利用していく多数者の論理が、民主主義を本来の民主主義とは全く違うものに変貌させてしまっている。だから最近では民主主義を否定する言も聞くことがあるけれど、まだ実現していないのに、民主主義を否定する人は、そこに何を持って知っているのだらうといぶかるのです。……でも仕方がない、デモクラシーを身を通して知っている人はこの社会にほとんどいないのだから、日本社会が民主主義とは言いがたい世の中であることは、原発震災が如実に教えてくれました（涙）。「流転せる苦悩の旧里はすてがたく、いまだ生まれざる安養浄土はこいしからずさうろう」と歎異抄にもあるように、経験できないデモクラティックな世の中を思い描き続け、そこむけて努力を続けるということ、は、とても難しいことだと思います。紛争解決の方法としても、やっぱり力には力どころか、自衛しないでどうするのだと、戦争へと引つ張られるような「苦悩の旧里」のよく知った方法で考えてしまうのが私たちですから。本当に果てしなく遠い道ではあるけれど、向く方向は浄土の方向しかないと同じく、デモクラティックに志向して行く生き方を、日常に創りだしていくしかないのではないかと思います。一人ひとりが大切にされ、一人ひとりが活かされる社会を願って。

デモクラティックスクールはまさにその努力の純粋な形です。学校という一つの閉鎖空間で、こどもというまだ柔らかい人たちと共に、「デモクラシーの冒険」を実現しているのです。小さくとも確かな民主主義。アメリカのサドベリーバレースクールはその先駆けでもう40年の歴史を持つて、世界にその種子を飛ばしています。デモクラティックスクールまっくろくろすけは十年前に、様々な出会いと協力と熱意という土壌の上に芽を出したその種子の一つです。私は自分の二人の息子と共にその立ち上げに関わり、デモクラティックとはどういうことを学んできました。結果そのすばらしさと、むずかしさと、自分がデモクラティックではないこと、しかしのちはデモクラティックな働きなのだと思ってきました。浄土真宗と言語は違いますが同じことを言っているのではないかと感じています。

姜尚中さんはデモクラシーのとても大切なことを私に教えてくれるに違いないと、講演を聞くのを楽しみにしています。皆さんぜひおいで下さい。（惟蓮）



「デモクラシーの冒険」 集英社新書
テッサ・モーリス・スズキ、姜尚中（著）
イラク戦争以降の民主主義入門。
内容説明

一〇〇万人を超える人類史上最大の反戦運動もむなしく、アメリカとその同盟国は、ついにイラク攻撃に乗りだします。デモクラシーを高くに謳いあげる国々による圧倒的な暴力は、人々の意志が政策に反映されることのない絶望的な光景を、かえって浮き彫りにしました。果たして、政治はひと握りの人間によって決定され、他の者たちは粛々とそれに従うほかないのでしょうか？本書では、世界的に進行するデモクラシーの空洞化を多角的に分析しながら、私たちの政治参加の可能性を探ります。日豪屈指の知性による、深く鋭い盛りだくさんの対話劇。「イラク戦争以後の民主主義入門書」を片手に、いっしょに考えてみませんか。

2011年9月25日(日) 13時より 姫路文化センター小ホール 今、市民がデモクラシーをどう深め、子どもの人権をどうサポートして行くのか 姜尚中氏講演会 基調講演「デモクラシーは手間がかかる」 まっくろくろすけ実践報告、パネルディスカッション